

<b>Title</b>	なぜ日本に聖書学が必要なのか（共同研究報告：組織神学研究センター連続講座）
<b>Author(s)</b>	野口，日宇満
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9：20-21
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4762">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4762</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【組織神学研究センター連続講座】  
なぜ日本に聖書学が必要なのか

2008年6月17日、聖学院生涯学習センター2階において、29名の参加者の下、第2回組織神学研究センター連続講座が開催された。今回は、聖学院大学人間福祉学部副チャプレンの左近豊氏に表記のテーマに基づいてお話をいただいた。概要は以下の通りである。

今回の発表は、主として近代聖書学の動向に注目しつつ、日本における「聖書学」の存在意義を考えたものである。日本の教会は、健全な聖書学を必要としているが、何をもって健全・不健全を判断するのはたいへん難しい問題である。それは「日本を場とする神学的思惟」によってそれらの妥当性を主体的に判断し、取捨選択する視点を必要としている。

近代聖書学の萌芽は18世紀中葉に求められる。それまで教義学、および教会の教理の正当性を裏づける役割を担ってきた「聖書学」が、自らの声を求めて教義学の懷から飛び出したのである。教義学から袂を分かった聖書学の歩みは、その後、歴史学と堅く手を結び合い、教会の外で古代オリエント学、古代近東文学、比較宗教学などと歩みをともにしてゆくことになる。その過程で、正典は断片化された史料（資料）となり、救済史は分断されて宗教史に組み替えられた。教義学からの独立を確固たるものとするあまりに、聖書学が歴史学へと自らを解体させる事態を招くケースもあった。

近代聖書学と教義学の区別が鮮明になり始めるのは、18世紀後半に活躍したZachariaeとGablerにおいてである。Gablerにとって教義学は時代に即して常に変わりゆく営みであり、そのような営みに左右されることのない、歴史に根ざした不変の学としての聖書学確立の必要性を痛感していたのである。しかしGablerの意に反して聖書学者と教義学者は手を取り合うことのないま

ま、教義学から分離された聖書学の独自の歩みは  
加速度を増していった。

(2008年6月17日、聖学院生涯学習センター)

20世紀前半に聖書学の世界に地殻変動が生じ、  
Gabler 以来の聖書学が抱えてきた関心は、普遍  
的理念の探求から聖書宗教の本質の追求へと移行  
していった。

聖書学の Sitz im Leben (場) は信仰共同体で  
あるが、その共同体が揺らぐとき、聖書学も揺ら  
ぐ。北米社会のひとつの崩壊の時代に、Childs は  
聖書学においても、いわゆる「啓蒙主義時代」以  
来の学問的枠組みの揺らぎを見出し、歴史批判的  
方法は聖書の神学的探求に寄与しえないと言い切  
った。ここに久しく続いた歴史学に解消しつつあ  
った聖書学の破綻が宣告された。Childs はこの危  
機を受け止め、神学的営みとしての聖書学構築の  
ために正典的アプローチを展開するのである。な  
ぜならば聖書はそもそも信仰共同体において成  
立してきた書物ゆえ、共同体信仰の規範である正  
典こそが「聖書学」の文脈として最適だからであ  
る。また Brueggemann は、再構築されたイスラ  
エルの歴史においてではなく、聖書で語られるイ  
スラエルの証言を通してのみ、我々は神を知ると  
述べる。証言者が語り口を選択し、そこで語られ  
る証言によって神のリアリティーが生起し、啓示  
となる、と。

「なぜ日本に聖書学が必要か？」それは、聖書  
学が、コルプス・クリスティアヌムの「外」に  
ある日本に、「正典」と「証言」という聖書学の  
概念を到来させ、そこにある聖書の語りかけを  
聞き取る耳を備えさせ、外から突入する預言者的  
alternative な世界観を持つ共同体の形成を促す営  
みだからである。

今回の発表の要約は以上であるが、その後の質  
疑応答において、多様な価値観が交錯する現代の  
日本の社会において、いかに聖書学が聖書を真理  
の光として指し示す本来の預言者的役割を果たす  
ことができるのか、活発な議論が交わされた。

(文責：野口日宇満 聖学院大学大学院アメリカ・  
ヨーロッパ文化学研究科 博士後期課程)